

論 文 要 旨

氏 名 小崎 太一

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

郭沫若・陶晶孫を中心とした中国現代文学の唯美主義と表現主義の研究

論文要旨 (別様に記載すること)

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク(1枚)を併せて提出すること。
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

論文要旨別紙

小崎太一

序章に述べる様に、本博論の目的は1920年代の中国現代文学を、日本に身近な視点で問い直すことにある。1919年の五四運動から、1927年の第一次国共合作の崩壊までの20年代文学は、魯迅の『吶喊』や郭沫若の『女神』等が出版されるなど、文学的な成果が豊かな時期であり、かつ第一次世界戦争から日中の十五年戦争の間の、日中両国の関係が比較的良好だった時期でもあった。その中で郭らの創造社は、日本留学生を主要成員としていたため、日本と常に密接な関係にあった。彼らのロマン主義から、30年代のプロレタリア文学に至る流れが、従来の日本に身近な視線での20年代文学モデルだが、本博論では同じ創造社の陶晶孫に注目して、ロマン主義であるより唯美主義であった20年代初期から、中後期の表現主義という流れを描き、それを陶晶孫モデルとして提示している。中国文学は古来政治性をその特質としており、従来の20年代文学モデルもその政治性が強調されて来たが、陶晶孫モデルはそれらと違い、政治的でなく純文学的なものであり、中国文学の幅広さの現れである。

第1章では、陶晶孫の唯美主義に軸足を置き、福岡を離れる（1923年3月）までの陶と郭沫若の文学作品を再考している。陶の唯美主義は当時の中国文学を代表するものだった。その陶の唯美主義を推奨した郭沫若の文学にも、陶に通じる唯美主義が認められる。かつそれに収まらない要素もあり、水泳を通じた自然との一体化など、それまでの中国文学にはないロマン主義の表れだった。また郭の唯美主義にはイギリス世紀末の『サロメ』と中国晩唐の李商隱を繋ぐ性質もあったこと等を論じている。

第1節でまず、その唯美主義を従来指摘されて来た陶晶孫の福岡期（1919年10月～1923年3月）の文学作品を、「夜」・「水」・「死」のキーワードから分析した。そして「夜」の「水」に沈む、子どもの幼さを守るための「死」を賛美する、世紀末的な唯美主義があることを指摘した。また恋愛が作品の主題として扱われるのが避けられて、中国的なものが見当たらないボーダーレスさがあることも強調、唯美主義には当時の福岡での消極的な生活が反映している可能性も指摘した。

第2節では、郭沫若の『女神』を中心とした「水」の想像力を考察した。初期の郭沫若は「水」の詩人だった、当時の詩には「水」が多く扱われ、自然との融合・唯美的な神秘・破壊のエネルギーがそれら「水」に読み込まれていた。後2者は共に自滅へと繋がる想像で、郭の当時の「水」は不安定なものだった。それは英国帰りの徐志摩には受入れられないものだったようで、その滅裂さ故に徐は郭の「水」を批判した。後に郭はこれら「水」から、エネルギー以外の想像を捨て去り、またそのエネルギーも去勢されたものとなった。

第3節では、第2節で扱った郭沫若の「水」への、接し方としての水泳に注目して論じた。郭は幼少から水泳とは関わりがなかったのだが、日本留学中（1914年～1923年）に水泳を学び、その鍛錬にかなり時間を割いている。彼が学んだのは当時日本で広く学ばれていた伝統的な日本泳法だった。異国での水泳が身近な生活や、自然との同一を唱える日本泳法の日本伝統的思想、当時の日本の国民体育推進という社会背景、そして海水浴というものが日本でも当時まだ真新しい行楽方式だったことなどが、郭の文学、特に福岡に来て（1918年）博多湾海岸の近くに暮らしていた間の、自然との一体化を歌うロマン主義の詩に反映しており、極めて日本的な影響である。

第4節では、郭沫若の留学（1914年～）前の旧体詩を扱っている。それらは郭の没後『郭沫若少年詩稿』に纏められたが、そこに晩唐・李商隱の詩を踏まえた判断できる作が含まれている。『唐詩三百首』の学習等を通して、郭はそれら李の詩と幼少から親しんできたが、後の回想には李の名を全く挙げず、留学後の詩には李の影響が殆ど見られない。例外が『サロメ』中国語訳に付された詩「ミサンスロープの夜の歌」（1921年）である。旧体詩を捨てて口語自由詩を創造するために、李詩の耽美性と音楽性は捨てられた可能性があるが、少なくとも留学前旧体詩と「ミサンスロープの夜の歌」の両者に共に用いられ

た「鮫人」の語が、李詩を典故とした可能性が高い故に、この1点を通し、郭の詩想の中で、中国晩唐の唯美主義がヨーロッパ世紀末の唯美主義と結びつけられていたことになる。

第Ⅱ章では、陶晶孫の表現主義文学を論じた。1923年3月に郭沫若と共に九州帝国大を卒業し、郭ら創造者成員の帰国をよそに、1人恋人の待つ仙台の東北帝国大に進学し、恋愛と結婚をした陶だが、仙台とその後の東京で書かれた作品に見られる、それまでの唯美主義と全く別の表現主義を、その起因と、その内容に分けて論じた。

第1節では、陶晶孫文学の表現主義が、日本の社会変化の影響から生まれたことを指摘した。1923年9月1日の関東大震災は、陶自身も幼少から過ごした東京の街が崩壊し、それまでの江戸の伝統がそこで寸断された。また混乱の中で大量の朝鮮・中国人が虐殺され、発せられた戒厳令は、その後の治安維持法に発展した。このように関東大震災は大正文化から昭和への変化の契機とされる、社会的な事件でもあった。当時仙台に留学中だった陶晶孫は、直接震災には巻き込まれてはいない様で、また作品中にも震災に殆ど言及していない。しかしそれ以前の福岡での唯美主義の作風が、その後の現代主義の作風に変化し、またそれまで正面から扱わなかった恋愛や中国が扱われる様になる等、震災後の文化からの明らかな影響がある。

第2節では、仙台・東京で陶晶孫が書いた表現主義の作品には、日本モダニズムが盛り込まれていることを論証した。20年代後半から30年代半ばまで、日本で流行した社会思想である日本モダニズムは、機械文明の合理主義と、アメリカの風俗からきた性的なナンセンスが特徴とされる。自身の恋愛・結婚を背景に、陶は性的な作品を描き、そこに唯物論的な物質で構成された表現主義の描写を用いた。陶は意図的にその表現主義に盛られた日本モダニズムを中国に持ち込もうとした。それは当時の中国文壇の中でかなり異質な、日本的なものだったが、創造社そして中国現代文学の、それ以前のロマン主義と、その後のプロレタリア文学を繋ぐ位置付けが出来る。

第Ⅲ章は補論部分に当たり、第Ⅰ・Ⅱ章では扱わなかった、20年代文学の3つの問題を考察している。

第1節では、福岡の街が、中国現代文学に与えた影響を論じた。郭沫若と陶晶孫は共に福岡の九州帝国大学で医学を学び、福岡で文学者として世に出たが、郭の東京・京都への渴望と、陶の福岡への拒絶的な回想から、彼らが共に福岡へ望んで来たとは考えられないことを指摘。それなのに何故福岡に来たのか、理由として九州帝国大が無試験で入学できた点と、中国人留学生運動から離れる意味が考えられる。結果として、福岡の自然の中で郭は詩人としての翼を延ばすことができ、陶も郭からの影響と、その後の恋愛に繋がるものを得た。

第2節では、閉鎖後の30年代に郭沫若が異軍突起とした創造社が、異軍でも突起でもいことを証明した。創造社の成員は元々周作人ら、北京の当時主流の文学者と強い繋がりがあり、創造社の登場も、仲間の増加として文壇に歓迎された。創造社の1員で北京大学教員の張定璜は、京都大学で厨川白村に学んだ英文学の知識と、装丁まで気を配る唯美主義の主張で創造社に尽くしたが、その人道主義の発想故に、党派攻撃に走った郭らに反発し創造社を去った。派手な党派攻撃で創造社は他の文学者と断絶し、若者の喝采を得たが、彼らが捨て去った張らの人道主義的発想と、周や張らが北京で1期だけ出版した雑誌『駱駝』（陶晶孫も日本モダニズムの戯曲を寄せている）は、創造社初期の1つの選択肢の体現だと言える。

第3節では、陶晶孫文学中の「2人の女の子」のテーマを分析した。陶は1927年10月に作品集『音楽会小曲』を出版後、文学史では30年代に分類されるのだが、それまでの大学生生活の作風を離れて、プロレタリア文学作品を執筆する。その直前の『音楽会小曲』を締めくくる小説「二人の女の子」には、中国人と日本人の2人の女性が登場し、国籍の対比がなされている。主人公はモダンな中国人の恋人と、最近すれ違いを感じるものの、銀座で出会った旧知の日本人女性の勧めもあり、その関係を前向きに考える。日本のモダン文化を支えに中国に向かい合おうとする態度が見て取れる。それはそれ以前に描かれた「2人の女の子」のテーマよりも、政治的に幾分にも積極的な意思表示だったが、一方で

日本の女性が自らを主張する兆しが見え、主人公を含めた3者の関係のほころびが見える等、その後の日中両国関係を暗示する面もある。

以上、1920年代の中国現代文学を、その間日本で留学していた陶晶孫の文学を中心に、声高なロマン主義よりも静謐な唯美主義に注目し、その後の表現主義へと変化する非政治的な文学の流れを、中国現代文学の陶晶孫モデルとして提唱したい。20年代の幸福な日中両国関係を背景に、日本で身近なところで生まれた文学モデルとして、今後更に緊密になる日中両国関係の発展に、何らかの役に立てれば、と考えている。